

# 特別支援学校における センター的機能の充実に関する研究

—多様なニーズへの対応を可能にする校内体制の確立を通して—

## 特別支援学校におけるセンター的機能に関する状況調査結果 《補助資料目次》

1	調査結果と分析	1
(1)	担当者	1
	ア 校内体制について	1
	イ センター的機能の取組について	4
	ウ センター的機能の課題について	7
(2)	支援センター部の担当者	8
	ア 訪問支援体制への要望	8
	イ 一人で相談対応が難しい理由について	8
	ウ センター的機能の課題について	9
2	調査についての考察	10
	【参考資料】	
	調査用紙（担当者用・支援センター部担当者用）	12

平成 30 年 2 月 9 日  
岩手県立総合教育センター  
長期研修生  
所属校 岩手県立花巻清風支援学校  
山 根 基 義

## 1 調査結果と分析

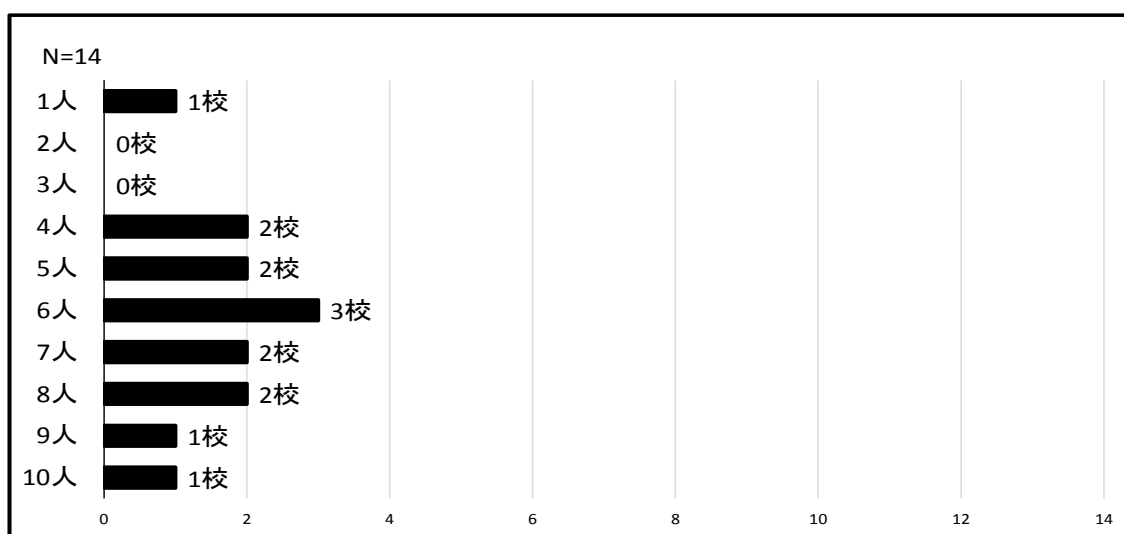
調査は、平成 29 年 7 月に実施した。調査の対象校は、岩手県の特別支援学校 13 校 1 分校とした。そのうち、調査は特別支援学校におけるセンター的機能の役割を担う校務分掌担当者（主担当者 14 名、支援センター部員 52 名）から回答が得られた。

### (1) 主担当者

#### ア 校内体制について

##### (ア) 支援センター部員の人数について【図 1】

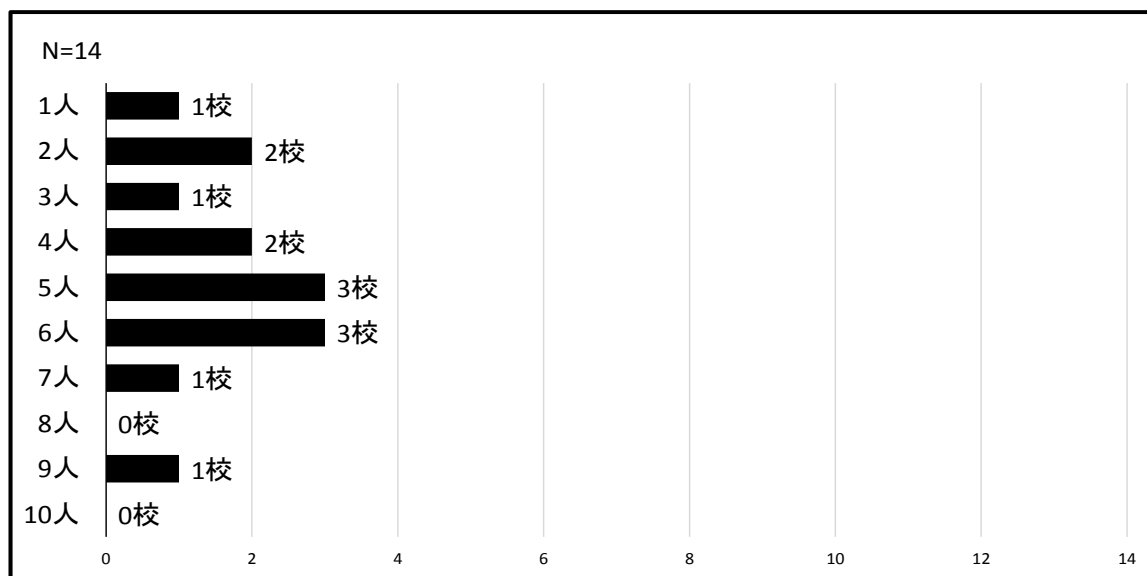
支援センター部員は、1 人から 10 人で編成されていることが分かる。この人数の違いは、学校の教職員の総数に関係している。一つの学校あたり、約 10%の教職員が支援センター部として担当している。



【図 1】支援センター部員の人数

##### (イ) 訪問支援担当者の人数について【図 2】

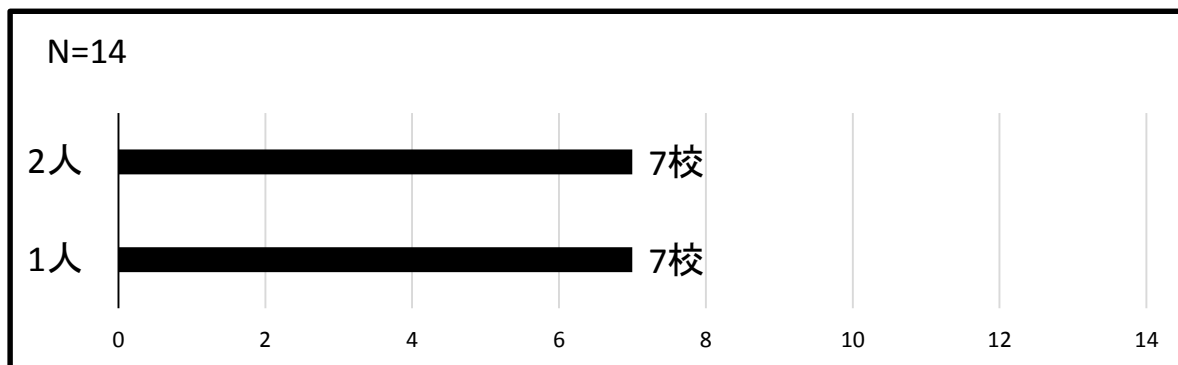
訪問支援担当者は、1 校あたり平均 4 名である。学校によっては、支援センター部全員が、訪問支援担当としている学校や訪問支援担当とその他の業務（校内研修会・相談件数処理など）担当を分けて校務の遂行している学校がある。



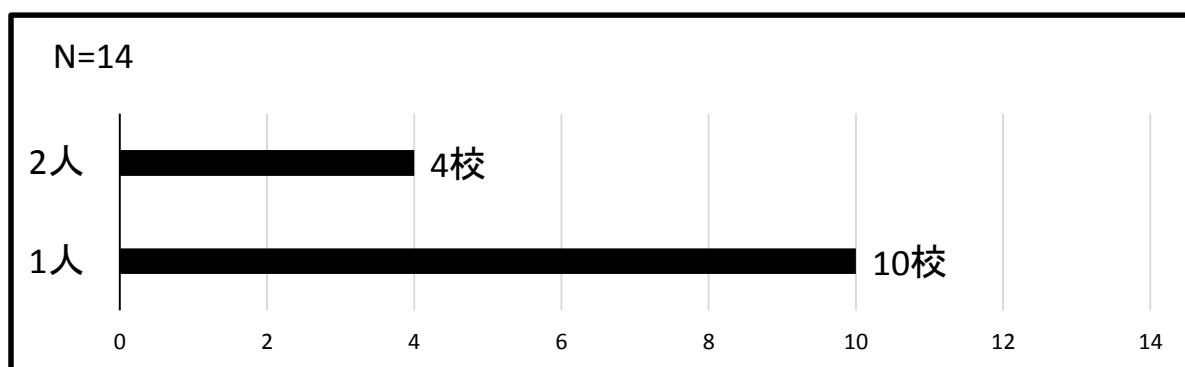
【図 2】訪問支援担当者の人数

(ウ) 相談 1 件あたりの訪問支援教職員数について【図 3】，【図 4】

相談 1 件あたり訪問支援する教職員数について回答を求めた結果が【図 3】，【図 4】になる。【図 3】は初めて訪問支援する際の人数，【図 4】は継続的に訪問支援する際の人数である。二つの結果を合わせ、初回は、2 人で訪問し、2 回目の訪問の際に 1 人で訪問支援を行う学校は 4 校あった。また、初回は 1 人で訪問し、2 回目の訪問の際に 2 人で訪問支援を行う学校は 1 校であった。



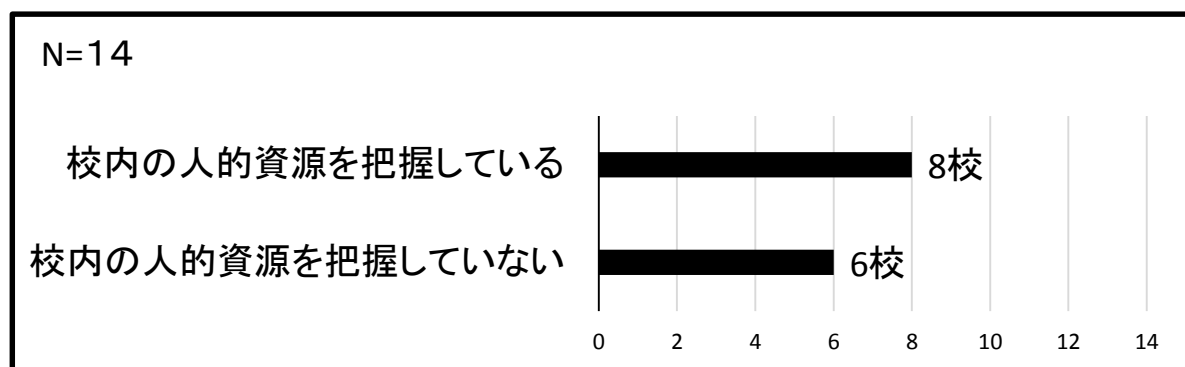
【図 3】 相談 1 件あたりの訪問支援教職員数（初回）



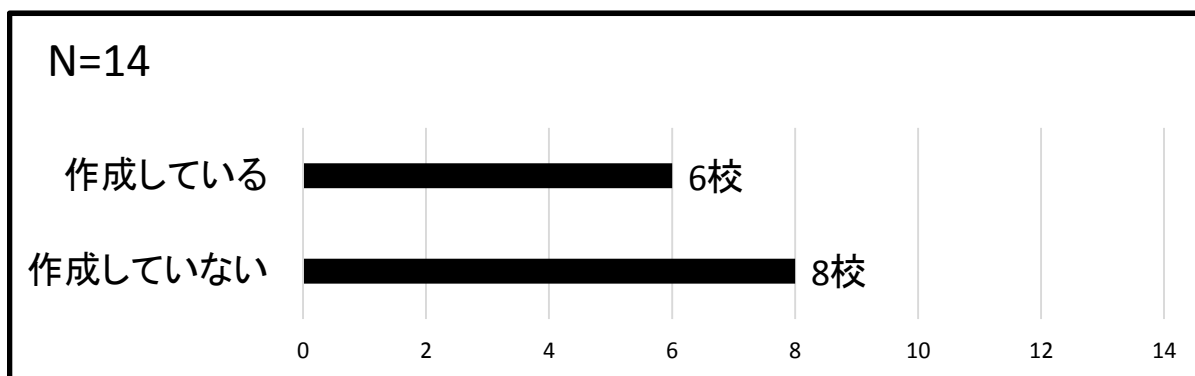
【図 4】 相談 1 件あたりの訪問支援職員数（継続的な支援）

(エ) 校内の人的資源の状況把握について【図 5】，【図 6】

校内の人的資源を把握しているか回答を求めた結果が【図 5】である。また、校内の人的資源のリストを作成しているか回答を求めた結果が【図 6】である。校内の人的資源を把握しなければ、活用することが難しい。二つの結果を合わせ、人的資源の把握をし、人材リストを作成している学校は、5 校あることが分かった。



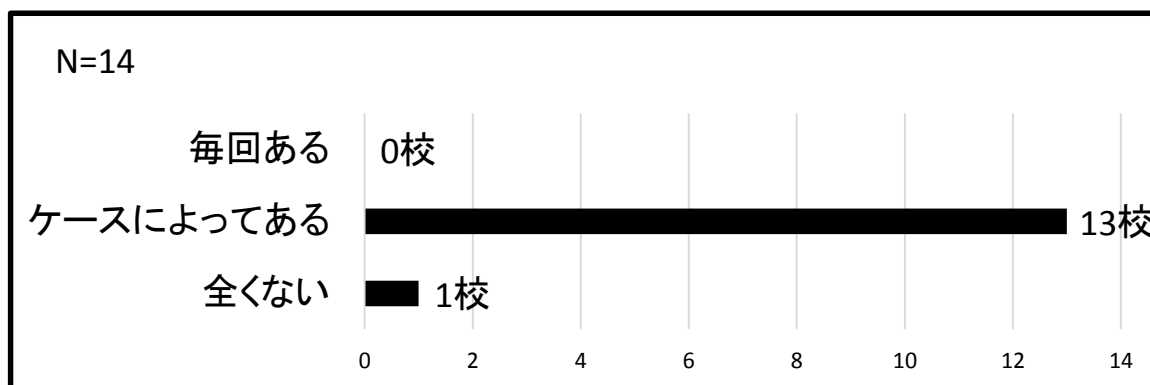
【図 5】 校内の人的資源を把握している学校



【図6】校内の資源リストを把握している学校

(オ) 支援センター部以外の教職員との連携について【図7】

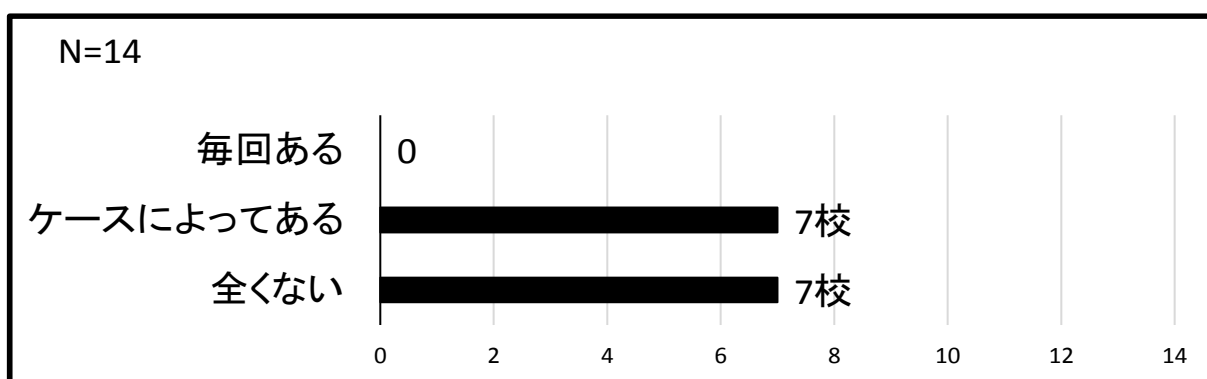
相談に対し、支援センター部以外の教職員との連携（相談に対する情報交換や検討）があるか回答を求めた結果が【図7】である。毎回支援センター部以外の教職員との連携はないが、ケースによって連携していることがわかる。



【図7】支援センター部以外の連携

(カ) 支援センター部以外の教職員が行う訪問支援について【図8】

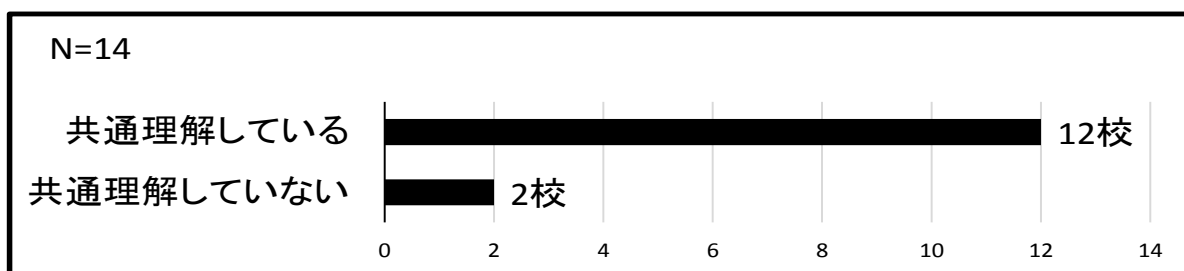
支援センター部以外の教職員が、訪問支援を行うことがあるか回答を求めた結果が【図8】である。ケースによって支援センター部以外の教職員が訪問支援している学校が半数に上ることが分かった。



【図8】支援センター部以外の教職員が行う訪問支援

(キ) 毎月の相談件数や内容の共通理解について【図9】

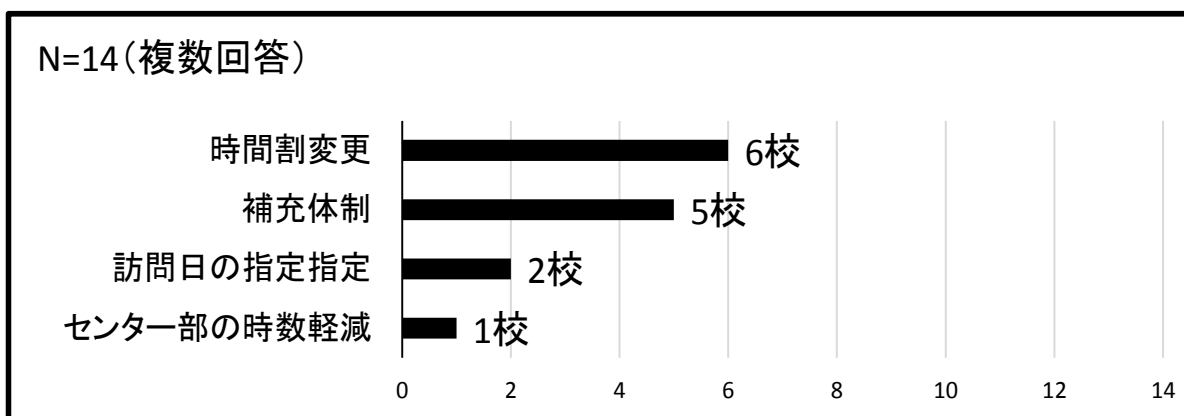
支援センター部内で、相談件数や内容について共通理解が図られているか回答を求めた結果が、【図9】である。訪問支援実施後の校務部会で、他の支援センター部員がどのような相談に対応してきたか共通理解する時間を設けている学校が大半であった。



【図9】 相談件数や内容の共通理解について

(ク) 訪問支援へ出かける際の校内体制において工夫していることについて【図10】

支援センター部内で、訪問支援に出かける際に工夫していることについて、自由記述で回答を求め、まとめた結果が【図10】である。時間割変更や補充体制を取るなど授業で調整している学校が多いことがわかる。

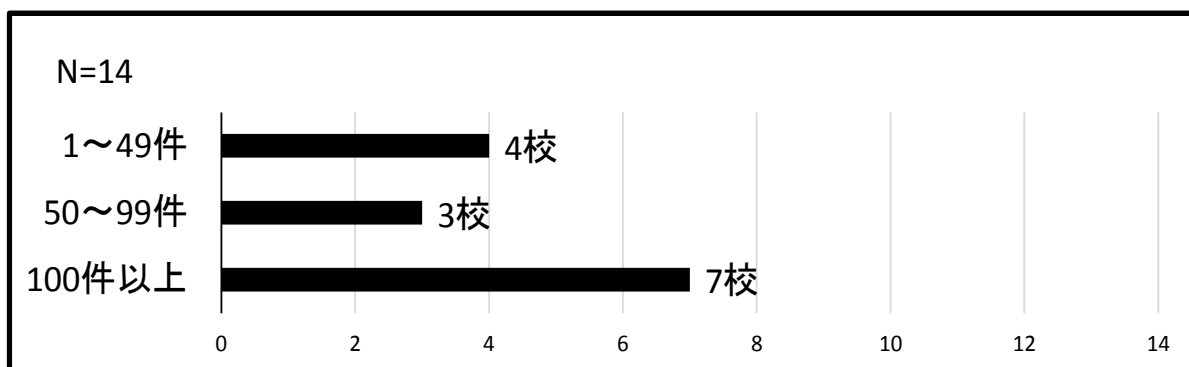


【図10】 訪問支援へ出かける際の校内体制における工夫について

イ センターの機能の取組について

(ア) 平成28年度に実施した訪問支援の延べ件数について【図11】

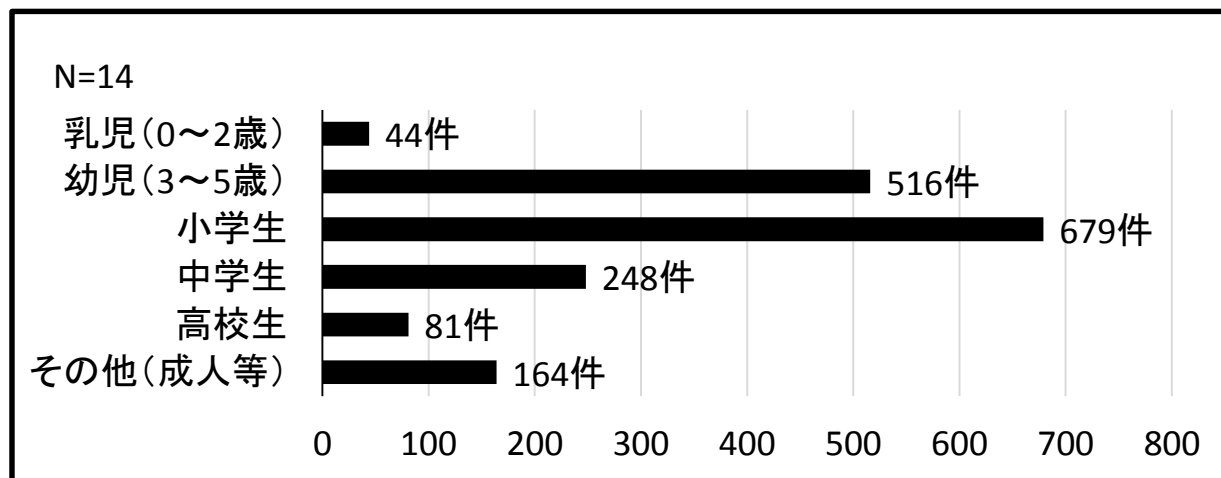
平成28年度に実施した訪問支援の延べ件数について回答を求めた結果が【図11】である。半数の学校で、100件以上の相談に対応していることが明らかになった。



【図11】 平成28年度に実施した訪問支援の延べ件数

(イ) 平成 28 年度に実施した訪問支援の対象とその延べ件数について【図 12】

訪問支援の対象と件数をまとめた結果が【図 12】である。小学生や幼児の段階が特に件数が多いことが分かった。



【図 12】平成 28 年度訪問支援の対象とその延べ件数

(ウ) 平成 28 年度に実施した訪問支援において対応した児童生徒の障がい種別【図 13】

訪問支援において、対応した児童生徒の障がい種別についてまとめた結果が【図 13】である。盛岡地区の特別支援学校は障がい種別によって設置されているため、訪問支援も障がい種別によって対応している。しかし、地域に一つ設置された学校は、多様な障がいに対する訪問支援が求められていることが分かる。

盛岡視覚支援学校	視覚							
盛岡聴覚支援学校	聴覚							
盛岡となん支援学校	肢体							
盛岡青松支援学校	知的	発達						
盛岡峰南高等支援学校	知的	発達						
盛岡みたけ支援学校	知的	発達						
奥中山校	知的	発達						
花巻清風支援学校	知的	発達						
前沢明峰支援学校	知的	発達						
一関清明支援学校	視覚	聴覚	知的	発達	肢体			
気仙光陵支援学校	視覚	聴覚	知的	発達	肢体	病弱	重度重複	
釜石祥雲支援学校	知的	発達	病弱	肢体				
宮古恵風支援学校	視覚	聴覚	知的	発達	肢体	病弱	重度重複	
久慈拓陽支援学校	視覚	聴覚	知的	発達	肢体	病弱	重度重複	

【図 13】平成 28 年度訪問支援で対応した児童生徒の障がい種別

(エ) 平成 28 年度に実施した訪問支援の相談内容【図 14】

訪問支援において、対応した相談内容の回答を求めた結果が【図 14】である。「指導や支援についての相談・助言」が多いが、地域に一つ設置された特別支援学校の相談内容は、多様化していることが分かる。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
盛岡視覚支援学校	○	○		○			○			
盛岡聴覚支援学校		○		○	○					
盛岡となん支援学校		○	○	○						
盛岡青松支援学校	○	○	○	○						
盛岡峰南高等支援学校	○	○		○		○			○	
盛岡みたけ支援学校		○	○	○		○	○		○	
奥中山校	○	○	○	○		○	○		○	
花巻清風支援学校		○	○			○	○			
前沢明峰支援学校	○	○		○		○	○			○
一関清明支援学校	○	○	○	○	○	○	○	○		
気仙光陵支援学校	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
釜石祥雲支援学校	○	○	○	○		○	○		○	
宮古恵風支援学校	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
久慈拓陽支援学校	○	○	○	○	○	○	○		○	

1	障がいの状況などについての実態調査・評価等
2	指導や支援についての相談・助言
3	個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成についての相談・助言
4	児童生徒の支援体制について相談・助言
5	合理的配慮に関わる環境整備面についての相談・助言
6	就学や転学等についての相談・助言
7	進路や就労についての相談・助言
8	他の特別支援学校への橋渡し
9	他機関(医療等)への支援の橋渡し
10	その他

【図 14】平成 28 年度に県内特別支援学校が訪問支援で対応した内容

(ウ) 平成 28 年度に実施した訪問支援したケースの中で対応に苦慮したケース【資料 1】

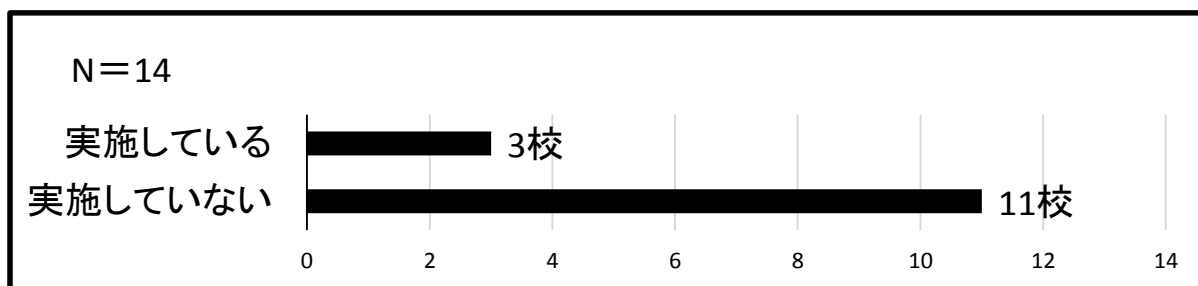
訪問支援において対応に苦慮した相談内容や支援の方法について回答を求めた結果が【資料 1】である。通常の学級で学ぶ支援が必要な児童生徒への支援が対応に苦慮したケースとして多く挙げられている。

【資料 1】対応に苦慮したケース

障がい種・障がい名	対象児童生徒の在籍	相談内容	支援したこと
聴覚障がい	保育園	補聴器の装用について	補聴器の装用も練習が必要など
発達障がい	小学校(通常の学級)	不安定な状態の対応 集中が続かず落ち着かない児童への支援	本人が落ち着ける場所の確保 保護者から認められることを促す 学級集団全体への声がけや評価の仕方
両目視神経萎縮	中学校(弱視学級)	支援の仕方、進路、本人の意識について	見やすいように座席の配慮、進路の提案
トゥレット障害	中学校(通常の学級)	チック症状があり、授業参加が難しい	達成感を持てる場面設定すること 医者と相談し、転院も考える等
ASD (自閉症スペクトラム症)	中学校(通常の学級)	クラスメイトとのトラブル 個別指導をしているが、率直に話が聞けない状況	話ができる職員を作る 場合によっては医療とつながること職員体勢等
知的障がい	中学校(特別支援学級)	教師や家族関係は良好 友達との関わりで極端に消極的な生徒	親学級の集団に入ったときの座席配置の工夫 会話のルールや相手の気持ちの読み取り方
肢体不自由	中学校(肢体不自由学級)	肢体不自由に配慮した個別の支援方法について	教科担当制である中学校の肢体不自由学級において、学級担任が行うべきことを学校の中で位置付けていくこと 自立活動の時間の確保が年度途中からは難しかった
発達障がい傾向	高等学校	対人関係がうまくいかず、学力不振で登校しぶりが 見られる生徒の支援について	発達検査を実施して、生徒の特性を把握し、有効な手立てを担当者と検討し支援に当たっている
知的障がい・視覚障がい	高等学校	不登校と家庭支援	不登校については、直接本人とつながる工夫を提案 家庭は福祉サイドからの支援を提案
発達障がい	通常の学級	他のことに気が取られ指示がとらない	一度の説明で聞き逃しても、見て理解できるよう視覚的な支援をするよう提示した
なし	通常の学級	登校渋り、不安、対人関係が難しい	WISC-IIIで本人の特性の理解した 対人関係に関しては母親も緊張や不安があり、SSW(スクールソーシャルワーカー)と連携し、学校でできる支援についての確認をした
ADHD	通常の学級	落ち着きがなく授業に集中できない 教室の飛び出しや暴言	個別学習時間の確保とソーシャルスキルトレーニングの提案

(カ) 訪問支援に関する満足度調査の実施状況【図 15】

訪問支援における満足度調査の実施状況について回答を求めた結果が【図 15】である。相談先の学校へ満足度調査を実施し、評価していただいている学校は3校で、ほとんどの学校が未実施であることが分かった。



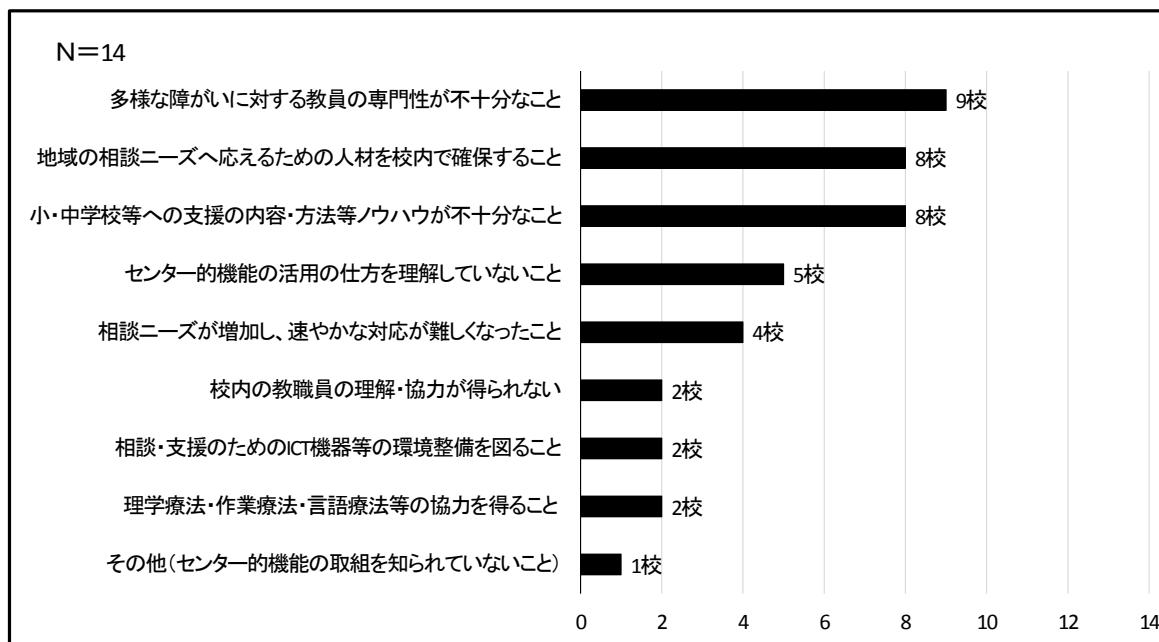
【図 15】訪問支援に関する満足度調査の実施状況



ウ センターの機能の課題

(ア) センターの機能の課題【図 16】

センター的機能の課題について、学校の課題として回答を求めた結果が【図 16】である。「教員の専門性」や「人材の確保」など人的資源について課題とする学校が多く見られた。



【図 16】 センターの機能の課題

(イ) センターの機能が有効に機能するための手立て【資料 2】

センター的機能が有効に機能するために考えられる手立てについて自由記述で回答を求めた結果が【資料 2】である。センター的機能に対する教職員のスキルや意識の向上を手立てとして挙げられた。

【資料 2】 センターの機能が有効に機能するための手立て（自由記述）

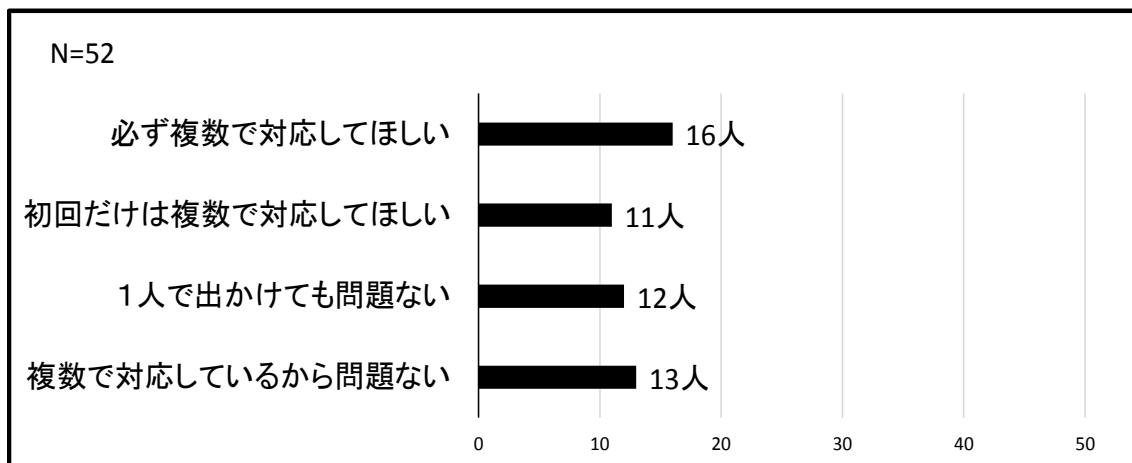
- ・多様なニーズへの対応する専門性（福祉，医療，カウンセリング等も含む）の向上や支援方法に関するスキルの向上 3
- ・支援部以外の意識の向上
- ・人材の育成（担当者が単年で交代せず，複数年担当してスキルの向上を図る）
- ・支援者の主訴に対する支援内容のリサーチ力（個人の専門性の向上+組織力の活用）
- ・特別支援学校内の出張のしやすさ（校内体制）
- ・電話で継続的にやりとりすること

※    は同内容の人数

(2) 支援センター部の担当者

ア 訪問支援体制への要望【図 17】

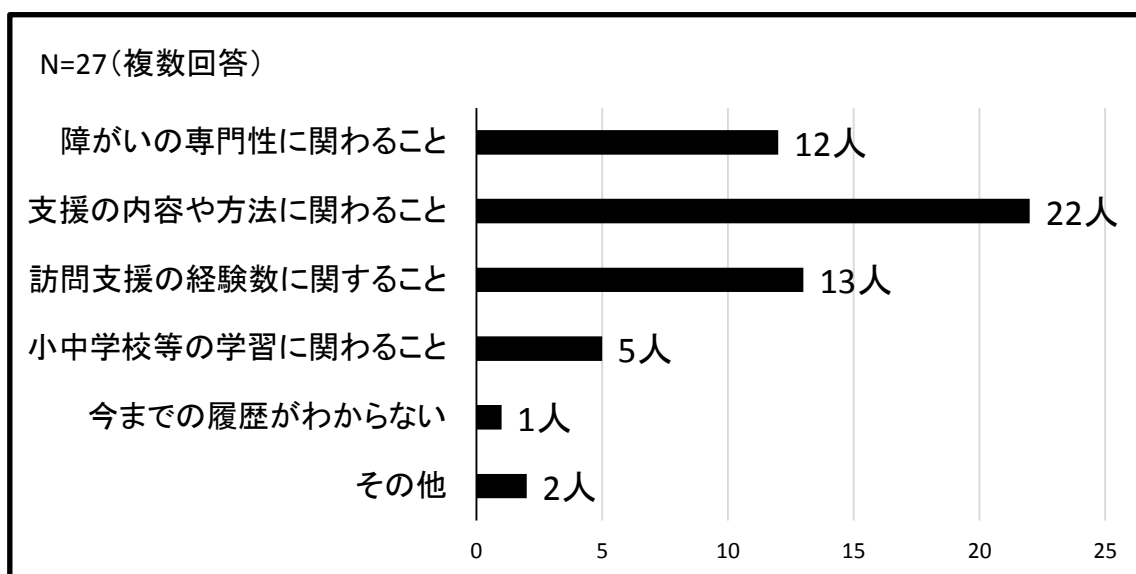
訪問支援へ出かけるように言われた場合の要望について回答を求めた結果が【図 17】である。特別支援学校側の訪問支援の体制として、「必ず複数で対応してほしい」、「初回だけは複数で対応してほしい」と回答した教職員が 27 名になった。この回答結果は、訪問支援の体制として「複数で対応しているから問題ない」と回答した 13 名を除いた 39 名のうち、27 名（約 70%）が複数の体制を望んでいるという結果になった。



【図 17】 訪問支援体制への要望

イ 一人で相談対応が難しい理由【図 18】

アで複数の体制を望んでいると回答した 27 名を対象に、一人で相談対応が難しい理由について回答を求めた結果が【図 18】である。「支援の内容や方法に関すること」という、相談対応の技術面に関することや経験数に関する理由などから、一人で訪問支援に取り組む不安や支援センター部員の課題が明らかになった。



【図 18】 一人で相談対応が難しい理由

ウ センターの機能における訪問支援が有効に機能するための手立て【資料3】

支援センター部担当者を対象に、センター的機能における訪問支援が有効に機能するために必要なことを自由記述で回答を求めた。その結果が【資料3】である。特に「校内体制に関すること」では、支援の手立てを訪問する際、事前に検討することやチームで組織的に動くこと、校内の共通理解、特別支援学校の教職員としての意識について挙げられた。

【資料3】訪問支援が有効に機能するための手立て（自由記述）（N=52）

校内体制
<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内体制の充実 7</li> <li>・支援内容や方法について事前に校内で相談できる校内体制 4</li> <li>・チームで対応する（組織的に動く） 4</li> <li>・相談校とのやり取りを校内で周知する 3</li> <li>・特別支援学校としての支援レベルを保つことの必要性 2</li> <li>・校内理解 2</li> <li>・専門性の継承（人材育成）</li> <li>・学校コンサルテーションの枠組みで相談対応する</li> <li>・業務内容の円滑な引継ぎ</li> <li>・特別支援学校の教員として、地域に暮らす子供たちの支援をする</li> </ul>
研修
<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員としての専門性向上 31</li> <li>・訪問支援内容、方法に関する研修システム 20</li> <li>・異校種（小中高）の教科内容の理解（カリキュラム）、指導の方法の理解 10</li> <li>・心理検査の実施、分析・考察、研修 5</li> <li>・障がいの特性に関する知識 3</li> <li>・訪問支援の様子についての情報交換の場を設けることでのスキルアップ 3</li> <li>・支援学級について知る 2</li> <li>・特定の障害に関する専門性（得意分野を身につける）</li> <li>・経験値だけではないセンター的機能に関わる教員研修の実施</li> <li>・法や施策を生かす支援にするために、センター的機能に関わる法や施策についての研修</li> <li>・カウンセリング能力</li> <li>・岩手県全域、各地域と連携する場（エリアコーディネーターや各特別支援学校コーディネーターと連携の場）</li> </ul>
課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・相談先からの事前の情報が抽象的で準備が難しい 5</li> <li>・関係機関との連携 5</li> <li>・相談先の学校の管理職を巻き込んだファシリテーションスキルの向上 3</li> <li>・訪問支援で対応した時以外の継続的な関わり</li> <li>・相談履歴がすぐに確認できるような記録の作成</li> <li>・限られた時間で相談先の管理職、担任、保護者、本人の思いを建設的に調整する力</li> <li>・複数の教職員で訪問支援する体制</li> <li>・他機関窓口の最新情報の把握</li> </ul>

※□は同内容の人数

## 2 調査についての考察

今回の調査により、各特別支援学校で行っている訪問支援の実態や、担当している教職員の思い、今後へ向けて必要なことなどが明らかとなった。

訪問支援の延べ件数は、半数の学校で100件以上であった【図11】。その訪問支援を支援センター部の訪問支援担当を教職員平均4名【図2】で担当していた。学校により、全員が訪問支援を行っている場合や、研修等と分担している場合があることが分かった。さらに、訪問支援を行うにあたり学校では、時間割変更や補充体制を行うなど、校内体制として工夫していることも明らかになった【図10】。また、相談内容について支援センター部内で共通理解を図っている学校はおおよそ85%になった【図9】。

校内体制として、訪問支援を円滑に行うことができるように取り組んでいるものの、実際に訪問支援をしている教職員の声から見える課題は大きく三つあった。

一つ目は、様々な障がい種への対応を求められていることである【図13】【図14】。学校の所在により、ある程度限定された障がいへの対応で良い場合と、様々な障がいへの対応を求められる場合があることが明らかとなった。訪問支援への対応は、経験豊富な教職員が担当していることが伺われるが、それでも全ての障がい種においての専門性を問われることの難しさがあると思われる。

二つ目は、対象年齢や校種、在籍している集団の大きさが多様なことである。対象年齢は、幼児から高校生と幅が広く【図12】、それぞれの発達段階へ応じることが求められる。また、特別支援学級に在籍している児童生徒への支援と通常の学級在籍の児童生徒では、可能な支援も異なることもあり、様々な視点で支援を提案する必要があることが、対応する難しさの一つとなっていると推測された。

三つ目は、実際の学校への訪問を一人または二人で行っていることである【図3】【図4】。初回から終わりまで一人で対応する学校や、初回は二人で二回目から一人、初回は一人で次回が二人など、学校により訪問する体制に違いがあることが分かる。そして【図18】からは、現在一人で対応している39名のうち27名（約70%）の教職員が複数対応を求めていることが明らかとなった。一つ目、二つ目で述べた難しさがある中で、担当者一人が、行動を観察することや担任等から様子を伺い、その場で支援を提案することを求められることの大変さが現れた結果であると考えられる。そのため、訪問支援担当者は、複数の教職員が関わることを望んでいると思われる【図17】。実際、ケースによっては、支援センター部以外の教職員が相談の検討に参加すること（93%の学校で実施有り）や、学校への訪問支援に対応（50%の学校で実施有り）するという結果が得られた【図7】【図8】ことも、複数対応が必要なことや支援センター部以外の人材を活用していることを裏付けていると感じた。

訪問支援が有効に機能するための手立てとして、実際に訪問する前に校内で検討できる体制や、チームでの対応が必要であると考えられる【資料3】。また、個人の力量による訪問支援体制ではなく、それぞれの教職員の専門性を有効に活用していく校内体制を構築していく必要があると考える。

## 〈主担当者用〉

### 特別支援学校におけるセンター的機能に関する状況調査

《調査》

支援センター部の主担当をされている先生に、貴校の支援センター部における訪問支援（小中学校等支援）の状況をお尋ねします。以下の設問に教えてください。

#### 1 校内体制について

- (1) 貴校支援センター部の職員数は何人ですか。( )に入力してください。  
( ) 人
- (2) (1)の中で、訪問支援を担当する職員数を( )に入力してください。  
( ) 人
- (3) 相談1件あたりの訪問支援人数について
- ① 初回の訪問支援する職員数を( )に入力してください。  
( ) 人
- ② 継続的な訪問支援する場合の職員数を入力してください。  
( ) 人
- (4) 校内の人的資源の状況を把握していますか。また、人材リストを作成していますか。当てはまる項目を1つ選び、回答欄へ記号を入力してください。
- ① 校内の人的資源を( ア 把握している ・ イ 把握していない )
- ② 人材リストを( ア 作成している ・ イ 作成していない )
- (5) 訪問支援の対応する際、支援センター部以外の職員と連携することはありますか。当てはまる項目を1つ選び、回答欄へ記号を入力してください。  
( ア 毎回ある イ ケースによってある ウ 全くない )
- (6) 支援センター部以外の職員が訪問支援を行うことはありますか。当てはまる項目を1つ選び、回答欄へ記号を入力してください。  
( ア 毎回ある イ ケースによってある ウ 全くない )
- (7) 毎月の相談件数や内容を集約し、支援センター部内で共通理解していますか。当てはまる項目を1つ選び、回答欄へ記号を入力してください。  
( ア している イ していない )
- (8) 貴校の支援センター部員が訪問支援に出かけるとき、どのような校内体制の工夫をしていますか。例を参考に記入してください。

例 教務担当による時間割の変更

岩手特別支援教育ボランティアバンク登録者派遣による授業補助 など

2 センターの機能の取組について

(1) 平成 28 年度に実施した訪問支援の延べ件数を教えてください。

( ) 件)

(2) 平成 28 年度に実施した訪問支援の対象とその延べ件数を教えてください。

1, 乳児 (0～2 歳)	件
2, 幼児 (3～5 歳)	件
3, 小学生段階	件
4, 中学生段階	件
5, 高校生段階	件
6, その他 ( )	件

(3) 平成 28 年度に実施した訪問支援の対象となった児童生徒の状況を教えてください。当てはまる項目を選び、回答欄へ記号を入力してください。(複数回答可)

ア 視覚障がいに関する相談

イ 聴覚障がいに関する相談

ウ 知的障がいに関する相談

エ 肢体不自由に関する相談

オ 病弱に関する相談

カ 発達障害に関する相談

キ 重度重複障害に関する相談

ク その他 ( )

(4) 平成 28 年度に実施した訪問支援の内容で当てはまる項目を選び、回答欄へ記号を入力してください。(複数回答可)

ア 障がいの状況などについての実態調査・評価等

イ 指導や支援についての相談・助言

ウ 個別の教育支援計画, 個別の指導計画の作成についての相談・助言

エ 児童生徒の支援体制について相談・助言

オ 合理的配慮に関わる環境整備面についての相談・助言

カ 就学や転学等についての相談・助言

キ 進路や就労についての相談・助言

ク 他の特別支援学校への橋渡し

ケ 他機関 (医療等) への支援の橋渡し

コ その他 ( )

- (5) 平成 28 年度の訪問支援したケースのなかで、対応に苦慮したケースの相談内容、支援の方法を具体的に 1 ケース以上 3 ケースまで教えてください。

障がい種または障がい名	対象児童生徒等の在籍	相談内容	支援したこと
例 LD (学習障害)	小学校 (通常の学級)	読み飛ばしがあり、音読が難しい。	定規や音読補助シートを用意し、行の横にあてながら読むようにした。

- (6) 訪問支援先の学校に対し、満足度調査の実施をしていますか。当てはまる項目を 1 つ選び、回答欄へ記号を入力してください。

( ア している イ していない )

### 3 センターの機能の課題について

- (1) 貴校がセンター的機能を実施する上での課題について当てはまる項目を選び、回答欄へ記号を入力してください。(複数回答可)

- ア センターの機能を実施するための校内の教職員の理解・協力が得られない
- イ 地域の相談ニーズへ応えるための人材を校内で確保すること
- ウ 多様な障がいに対する教員の専門性が不十分なこと
- エ 小・中学校等への支援の内容・方法等ノウハウが不十分なこと
- オ 地域の小・中学校等がセンター的機能の活用の仕方を理解していないこと
- カ 相談ニーズが増加し、速やかな対応が難しくなったこと
- キ 相談・支援のための ICT 機器等の環境整備を図ること
- ク PT (理学療法)・OT (作業療法)・ST (言語療法) 等の専門家の協力を得ること
- ク その他 ( )

- (2) センターの機能における訪問支援が有効に機能するために、どのようなことが考えられますか。自由に記入ください。

例 専門性の向上する 支援の内容や方法に関するスキルの向上 など

**アンケートは以上になります。ご協力ありがとうございました。**

## 〈支援センター部の担当者〉

### 特別支援学校におけるセンター的機能に関する状況調査

《調査》

支援センター部の担当をされている先生に、貴校の支援センター部における訪問支援（小中学校等支援）の状況をお尋ねします。以下の設問に答えてください。

1 訪問支援へ出かけるように言われた場合、あなたの意識についてお聞かせください。

- ア 必ず複数で対応してほしい
- イ 初回だけは複数で対応してほしい
- ウ 訪問支援は複数で対応しているので問題ない
- エ 一人で出かけても特に問題ない

ア・イ とお答えになった方は（3）

ウ・エ とお答えになった方は（4）

**\* 1でア、イにお答えになった方にお尋ねします。**

2 一人で相談対応が難しい理由として当てはまる項目を1つ選び、回答欄へ入力ください。（複数回答可）

- ア 障がいの専門性に関すること
- イ 支援の内容や方法に関すること
- ウ 外部相談の経験数に関すること
- エ 小中学校等の学習に関すること
- オ 今までの相談履歴がよくわからない
- カ その他（ ）

**\* すべての方にお尋ねします。**

3 センター的機能における訪問支援が有効に機能するためにどのようなことが必要だと考えられますか。自由に記入ください。

例 専門性の向上 支援の内容や方法に関するスキルの向上 など

**アンケートは以上になります。ご協力ありがとうございました。**